

ントとして所属団体等で活動，そこの学びや経験を踏まえて今春の日本農業学会大会（岡山）「レギュラトリーサイエンス講演」（内田 2022），その内容にその後の情報を追記した。）

参考文献等

Arvai, J. and L. Rivers III 2014, “Effective Risk Communication”(Routledge)
Davis, F.R. 2014. BANNED-A History of Pesticides and The Science of Toxicology. Yale University Press
唐木英明 2021. 「食の安全を科学で検証す

る」. 国際農業社.
Kinkela, D. 2011. DDT & The American Century. The University of North Carolina Press
木下富雄 2015. 「リスク・コミュニケーションの思想と技術」. ナカニシヤ出版.
小杉素子・土屋智子 2000. 「科学技術のリスク認知に及ぼす情報環境の影響」(財)電力中央研究所報告 Y00009(2000)
中島貴子 2017. 科学の不定性に気づき、向き合うとは. 「科学の不定性と社会」(本堂毅ら編). 第7章 pp.107-121. 信山社
中谷内一也 2015. 「信頼学の教室」. 講談社現代新書
奥野修司 2020. 「本当は危ない国産食品」.

新潮新書 886
Stirling, A. 2010. Nature 468: pp.1029-31.
内田又左衛門 2015. 「農業に関するリスクコミュニケーション」, 月刊フードケミカル. 2015年12月号 pp.28-34.
内田又左衛門 2022. 日本農業学会第47回大会(岡山)講演要旨集 p.22.
吉川肇子 2022. 「リスクを考える」. ちくま新書 1661
吉澤剛ら 2013. 科学技術の不定性と社会的意思決定. 「科学者に委ねてはいけないこと」(尾内隆之・調麻佐志編). pp.93-100. 岩波書店

田畑の草種

待宵草 (マツヨイグサ)

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

竹久夢二は上げ潮にのって次々と小画集を刊行していた。そんな夢二が元気であった明治の終わり頃の8月、夢二は犬吠埼の宮下旅館に避暑旅行に来ていた。そこで、たまたま夏休みで、旅館の隣家に遊びに来ていた秋田出身の少女「賢」と出会った。賢は夢二より八つ年下であったが文学少女で、姉もお茶の水女子師範出であるなど、才媛姉妹の妹であった。夢二にとって日が暮れるまで海岸を散歩しながら賢と語り合うのは心の惹かれる時であった。賢にとっても淡い初恋であった。

夏が過ぎ、夢二は東京へ戻り、賢も犬吠埼を離れた。賢が夢二と会っていたことを知った父親は賢の結婚を急がせた。夢二は翌年もまた賢に逢えるだろうと訪れた犬吠埼で、賢が嫁いだことを知り、自らの失恋を悟った。日暮れまで待ってもいつまで待ってももう来ることのない賢を想い、夕刻になってやっと咲き始め、朝には萎んでしまう「待宵草」のように心もとなく、想うまいと思つて涙があふれる、今夜は十七夜月だというのにその月も出そうもない、そんな思いが夢二の口をついて出たの

が「待宵草」の三行詩であった。

「待てど暮らせど来ぬ人を 待宵草のやるせなさ 今宵は月も出ぬさうな」

この詩に多忠亮が曲をつけ、大正ロマンの代表曲となった。

「待宵草」という種はなく、竹久夢二の「待宵草」はマツヨイグサ属の一種と考えられ、マツヨイグサかオオマツヨイグサと考えられる。

マツヨイグサはアカバナ科マツヨイグサ属の二年草。本州以南の河原や砂浜、鉄道路線沿いや路肩など、荒地や人為的に攪乱されたような環境を好んで生える。茎は直立し背丈は30cmから1m。葉は線状披針形で、花は上部の葉腋につく。花弁は広倒卵形で先端が凹んだハート形。夕方に大きさ3cm～5cmの黄色い花を咲かせ翌朝には黄赤色に変わって萎む。原産地は南米で幕末に観賞用として渡来したが、少し遅れて導入されたオオマツヨイグサやメマツヨイグサに取って代わられつつある。